

TAKE FREE

やっ(ぱり)



デパートの屋上にゾウがいた!展

をもっと楽しむ

37冊

選書・文

木下直之

(本展監修 / 静岡県立美術館館長・東京大学名誉教授)

高島屋史料館 TOKYO

01

※8月刊行予定!!

木下直之『ゾウに乗る』

東京大学出版会, 2026

藤ノ木古墳で見つかったゾウの透し彫りに始まり、札幌市円山動物園で生まれた子ゾウタオまでの「ゾウと日本人の1500年」を振り返る。普賢菩薩や山田長政、軽業師や子どもなど、ゾウはその背中にさまざまなものを乗せてきた。日本橋高島屋で開催中の「やっぱりゾウが好き」展の図録。ゾウを見る目が変わり、「やっぱり好き」に納得。

02

**荒俣宏『普及版 世界大博物図鑑 5 哺乳類』
平凡社, 2021**

実在と架空を問わない稀有な動物図鑑、天狗、河童、人魚、雪男も当たり前登場する。人間の想像力の広がり目目が開かれる。ゾウのページだけ開いて閉じないで。ほかに、蟲、魚、両生・爬虫類、鳥編あり全5巻、さらに絶滅・希少鳥類の別巻がある。

03

入江尚子『ゾウが教えてくれたこと』

化学同人, 2021

著者はゾウの知能の研究者、ゾウが人間には聞こえない低い周波数の声で会話していることや、数を認知する能力に優れていることが近年わかってきたという。ゾウについて知るばかりでなく、ゾウから学ぶことも多い、ということから「ゾウオロジー」と名づけた。

04

新村洋子『どこに行ってしまったの!? アジアのゾウたち』

合同出版, 2017

著者は写真家、今から24年前に訪れたベトナムの農村でたまたまゾウの姿を見て、その魅力にとりつかれた。同時に、絶滅の危機に瀕していることも知り、7年後には「ベトナムのアジアゾウ保護 ヨックドン」の森の会」を立ち上げた。この時、著者は69歳、その情熱に驚かされる。

05

**ジョゼ・サラマーゴ(著)、木下真穂(訳)
『象の旅』**

書肆侃侃房, 2021

16世紀半ば、リスボンからウィーンまでを歩いた(カタルニアからジェノバまでは船に乗った)ゾウの旅を、ポルトガルのノーベル文学賞作家サラマーゴが想像力たっぷりに復元する。将軍吉宗に贈られたゾウの長崎から江戸までの旅も、誰か、こんなふうにゾウ使いの視点で語ってくれたらいいのに。

06

福田正己『マンモス—絶滅の謎からクローン化まで—』

誠文堂新光社, 2017

もちろんマンモスをはるか昔に絶滅したけれど、シベリアの大地にマンモスの骨と牙は無尽蔵に残され、まれに冷凍マンモスも見つかる。そこからマンモスを再生させようという試みや、象牙のマーケットへの供給など、マンモスの「現状」を知るための最良の本。

07

**ローレンス・アンソニーほか『象にささやく男』
築地書館, 2014**

南アフリカに2000ヘクタールという広大な私設動物保護区を持つ男が、暴れゾウ7頭を引き取り、殺されそうになりながらも次第に信頼関係を築く話。タイトルの「ささやく」とは、実はゾウが男にささやいたのであり、そのことで男もゾウの声が聞こえるようになった。人が握手をするように、ゾウは鼻を差し出す。

08

**ポール・チェンバーズほか『世界中で愛され続ける ゾウのジャンボ物語』
柊風舎, 2009**

ジャンボ=巨大なもの（たとえばジャンボジェット機やジャンボ宝くじ）は、もともとこのゾウの名前だった。つまり、世界で一番有名なゾウ。アフリカのスーダンからパリへ、ついでロンドンに移り、動物園で人を乗せて人気者になった。さらにアメリカに渡ってサーカスで活躍し、鉄道事故で最期を迎えるという数奇な運命からは目が離せない。

09

**小川洋子『猫を抱いて象と泳ぐ』
文春文庫, 2011**

小川洋子さんは高島屋のタカちゃんを知っていたのかな。デパートの屋上で暮らしたゾウの登場から物語は始まる。ところが大きくなりすぎて、エレベーターに入らず、階段を降りることも怖がったところが、タカちゃんと違っている。そのゾウと「泳ぐ」とはいったいなんだろう？ それは本書を開いてのお楽しみ。

ゾウの絵本・写真集

10

**岩合光昭『アフリカではゾウが小さい』
毎日新聞出版, 2023**

岩合さんはネコの視線でネコを大きく撮る。ゾウははるかに大きいはずなのに、無数の生き物を育むアフリカは、信じられないぐらい大きいのだろう。

11

**松橋利光ほか『ゾウのひみつ（飼育員さんおしえて!）』
新日本出版社, 2014**

ふたりはコンビを組んで「飼育員さんおしえて!」シリーズを展開してきた。写真家は「生きものカメラマン」を名乗る江ノ島水族館の元飼育員、現場にいた人だ。ゾウの「ひみつ」に迫ろう。

12

**わたしたちの世界(著)、アラレット(著)『象：
フォトブック』**

Independently published, 2024

言葉のない写真集、ただひたすらゾウを眺める。初めてゾウを目にした時のように。

13

**宮沢賢治ほか『宮沢賢治童話全集 新装版
オツベルと象』
岩崎書店, 2016**

いつこの話かわからないが、ある時、白いゾウがひょっこり姿を現して、オツベルの下で働き始める。言葉はすぐに通じたけれど、気持ちはやがて通じなくなり、ゾウから笑い

が消える。ゾウと人の関係ばかりでなく、人を使う人と使われる人の関係も暗示。

14

まど・みちお（詩）、にしまさかやこ（絵）
『ぞうさん』

こぐま社、2016

「ぞうさん」は詩人まど・みちおのもっともよく知られる童謡。まどは生前にこんなふうに語っていた。「一番好きなかあさんも長いのよと誇りを持って言えるのは、ゾウがゾウとして生かされていることがすばらしいと思っているから」。『わたしのワンピース』の絵本作家西巻茅子が絵を寄せている。

15

土家由岐雄（文）、武部本一郎（著）『かわいそうなぞう』

金の星、2018

1943年に、空襲に備えるという名目で、上野動物園にいた3頭のゾウが殺された出来事は、この絵本によって広く知られる悲劇となった。戦時下で、同じことは各地の動物園やサーカスでも起こり、だからこそ、戦争が終わると再びゾウの姿を見たいという声が高まった。

16

小出隆司（著）・箕田源二郎（画）『ぞうれっしゃがやってきた』

岩崎書店、1983

戦後に生き残ったゾウは、名古屋東山動物園の2頭だけ。これを子どもたちに見せようと、おとなたちが協力して、1949年に「ゾウ列車」を全国各地から名古屋に向かって走らせた。

「やっぱりゾウが好き」という気持ちは、この時代が一番熱かったのではないかな。

日本美術の動物を知るために

17

定村来人『暁斎いきもの尽くし ゴールドマン・コレクション』

青幻舎、2026

河鍋暁斎の世界に暮らす動物を「擬人化」と呼ぶのは間違っている。むしろ、人間の方が動物の世界へと送り込まれているのだ。幕末にゾウの見世物を見た暁斎は、当時、一番たくさんゾウを描いた画家だろう。暁斎は、子どものころから生き物に親しみ、無類のカエル好きだった。

18

定村来人『河鍋暁斎の挑戦 狂画で拓いた新時代』

東京大学出版会、2023

暁斎は、1863年に江戸両国で見世物になっていたゾウを見に行き、写生をした。宣伝のためのチラシを描き、さらにゾウがありとあらゆる、およそあり得ない芸をする戯画シリーズを出版した。写生から戯画への飛躍が暁斎の真骨頂、その魅力に迫る。

19

金子信久『日本の動物絵画史』

NHK 出版新書、2024

20

金子信久『江戸かわいい動物 たのしい日本美術』

講談社、2015

ゾウを描いた画家に、俵屋宗達、伊藤若冲、長沢蘆雪、円山応挙、河鍋暁斎らがいる。ゾウの実物を見た画家は少ないが、ほかにも虎、獅子、麒麟、孔雀、鳳凰など、虚実入り混じって、古くから異国の動物が描かれてきた。もちろん日本の動物も。動物にフォーカスした日本美術史。

21

佐藤康宏『もっと知りたい伊藤若冲：生涯と作品』
東京美術、2006

22

辻惟雄ほか『若冲ワンダフルワールド』
新潮社、2016
若冲は、日本の風景にはあまり関心を示さず、身近な動植物を描くことに情熱を注いだ。《動植綵絵》に描かれた空想上の動物は鳳凰だけだ。ところが、案外とゾウは描いた。少年時代に、京都で一回だけ見た可能性があるのだが、若冲のゾウは仏教世界を生きた白いゾウである。

23

土屋貴裕ほか『もっと知りたい鳥獣戯画』
東京美術、2020
動物と日本人の交流、そしてそれがどのように表現されてきたのかを知るためには、《鳥獣戯画》を視野に入れなければならない。サル、ウサギ、カエルばかりが有名だが、そこにはゾウも登場する。

山王祭を知るために

24

福原敏男『江戸の祭礼屋台と山車絵巻 神田祭と山王祭』
渡辺出版、2015
祭礼研究の第一人者が山王祭と神田祭の実像に迫る。都市の祭礼は見せることに重点が置かれたから、どうしても行列は長く、華やかなものになる。それを伝えようとすれば絵巻に勝るものはないが、現代の書物とは折り合いが悪い。福原敏男教授と渡辺潔社長のコンビがチャレンジした。

25

都市と祭礼研究会編『江戸天下祭絵巻の魅力：徳川美術館蔵「神田明神祭礼図巻」 「山王祭礼図巻」』
渡辺出版、2021
天下祭とは、山王祭と神田祭の行列だけが江戸城内に入ることを許され、将軍が上覧したが故に与えられた呼び名。大名たちにとっても大きな関心事で、徳川美術館に伝来する山王祭と神田祭の絵巻は、尾張徳川家13代慶蔵が手元に置いていたもの。著者による分析は徹底している。

26

滝口正哉『江戸の祭礼と寺社文化』
同成社、2018
山王祭は山王権現（現在の日枝神社）、神田祭は神田明神（現在の神田神社）の祭神を神輿に乗せて氏子の町々を巡ることなのだから、そのベースには江戸に暮らす人びとの信仰がある。信心と娯楽、寺社と

盛り場は不可分。祭がなぜ人びとを熱狂させたのかを知るための格好のガイドブック。

見世物・サーカスを知るために

27

川添裕『江戸にラクダがやって来た日本人と異国・自国の形象』

岩波書店, 2022

外国産の珍しい動物は、いつの時代にも喜ばれる。江戸時代では、ゾウの次にやって来た大型動物がラクダだった。文政7年(1824)、オスとメス2頭のヒトコブラクダが江戸を皮切りに、10年以上も見世物になって各地を巡業した。見るだけで夫婦円満、その絵を貼っておけば病気にかからないと、ご利益たっぷり「霊獣」だった。著者はこのラクダの旅を丹念に追いかけた。

28

矢内賢二『明治キワモノ歌舞伎 五代目尾上菊五郎の時代』

講談社学術文庫, 2025

明治時代にやって来た外国サーカスに最も熱く反応した歌舞伎役者が五代目尾上菊五郎だった。なにしろ、明治4年にスリエサーカスを見て、「音響曲馬鞭」という芝居に仕立て、19年にチャリネサーカスが来れば、「鳴響茶利音曲馬」を興行、自ら団長・ゾウ使い・一本足の軽技師の3役を演じた。15年経っても、サーカスへの好奇心は一向に衰えなかった。

29

亀井俊介『アメリカ大衆文化覚書 サーカスが来た!』

平凡社ライブラリー, 2013

アメリカの明るくて楽しいサーカスは、まさに「地上最大のショー」だった(1952年に同名の映画がある)。アメリカの北部に対する南部、東部に対する西部、エリート文化に対する大衆文化をサーカスから読み解く本。半世紀前の刊行だというのにまったく色褪せず、現在のトランプ政権の通俗性が腑に落ちる。

動物園を知るために

30

木下直之『動物園巡礼』

東京大学出版会, 2018

このままでは日本の動物園からゾウがいなくなる。いや、動物園そのものの存在が問われた今から10年ほど前に、動物園を訪ねて東奔西走した。公立動物園ばかりでなく、地方の小さな私立動物園にも案内する。この本から『ゾウに乗る』は生まれた。

31

小宮輝之『昔々の上野動物園 絵はがき物語：明治・大正・昭和……パンダがやって来た日まで』

求龍堂, 2012

140年を超える歴史を持つ上野動物園の数々の絵葉書を見ながら、動物と日本人の交流を語る。ゾウもたっぷり登場する。著者は上野動物園の元園長、日本橋高島屋の屋上でタカちゃんの背中に乗った経験あり、

それが動物園の世界に入るきっかけになったようだ。

32

佐渡友陽一『動物園を考える 日本と世界の違いを超えて』

東京大学出版会, 2022

日本の動物園の過去と現在を考える本は数多いが、サブタイトルに「日本と世界の違いを超えて」をうたうとおり、とにかく視野が広い。動物園は変化しなければならない。より良い場所になるための指針。

33

佐々木央『ルポ 動物園』

ちくま新書, 2022

2008年から22年にかけて取材した140の動物園・水族館の名前が巻末にずらり並ぶ。著者はこれらを訪ね、飼育係と対話を重ねながら、動物園とは何かを問い続け、その思考を深めてゆく。動物園が持つ「原罪」という言葉は重い。

34

成島悦雄ほか『大人のための動物園ガイド』養賢堂, 2023

動物園人による動物園ガイド。タイトルのとおり、動物園を子どもや孫を連れて行く場所にとどめておくべきではない。そこは、生き物のリアルと向き合う場所なのだから。

35

太田匡彦ほか『岐路に立つ「動物園大国」動物たちにとっての「幸せ」とは?』

現代書館, 2022

余剰動物、動物交換、動物商、動物福祉など、動物園の陰に隠れてあまり見えて来ない世界の最新レポート。

その他

36

木下直之『増補 股間若衆 男性像における曖昧模っ糊りの研究』

ちくま文庫, 2025

「やっぱりゾウが好き」展の監修者を知るための最良の本、というだけの理由でこの本はここにある。ゾウの股間問題にまで触れてはいないが、動物を視野に入れることで、人間だけがなぜ股間界限に羞恥心を持ってしまったのかを自問する本。

37

木下直之『木下直之を全ぶ集めた』

晶文社, 2019

1冊でも全集という小さなこの本の意図は、「木下直之を全ぶ集めた」というひらがなに示されている。2018年から翌年にかけて、ギャラリーエークワッドで開催された「木下直之を全ぶ集める」展にちなんで刊行された。ちなみに、同展開催中にギャラリーのウェブサイトで「木下直之が全ぶ集った」を連載、それは今も閲覧可能。

木下直之（きのした・なおゆき）

（本展監修／静岡県立美術館館長・東京大学名誉教授）

1954年浜松生まれ。東京藝術大学大学院中退、兵庫県立近代美術館学芸員、東京大学総合研究博物館助教授、東京大学大学院教授を経て、2017年より現職。19世紀日本の文化を、美術・写真・見世物・祭礼・記念碑・博物館・動物園・戦争などの観点から研究してきた。著書に『美術という見世物』（平凡社1993/講談社学術文庫2010）、『わたしの城下町』（筑摩書房2007/ちくま学芸文庫2018）、『股間若衆』（新潮社2012/『増補 股間若衆』ちくま文庫2025）、『銅像時代』（岩波書店2014）、『せいきの大問題』（新潮社2017）、『動物園巡礼』（東京大学出版会2018）などがある。

展示情報

「やっぱりゾウが好きーデパートの屋上にゾウがいた！」

2026年3月13日（金）→ 2026年8月31日（月）

午前10時30分～午後7時30分 入場無料

高島屋史料館TOKYO 4階展示室

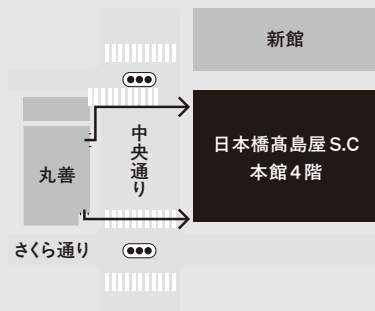
東京都中央区日本橋2-4-1 日本橋高島屋S.C.本館

第2火曜：祝日の場合は開館して翌日休館、8月19日

（水・全館休業）

丸善日本橋店から

高島屋史料館TOKYOへのアクセス



中央通りを挟んで向かいの建物です。

